

パネル討論をするメンドーサ氏（スクリーン内）、吉本氏（手前はモデレーター）の山内氏（右）20日、東京都千代田区



パネル討論 コロナ時代の文化交流

山内氏 人類は大きなパンデミック（世界的大流行）をこれまで何度も経験してきた。新型コロナウイルス禍のいま、国際文化交流がどのように行われているのか。

メンドーサ氏 私は日本とフィリピンの合作映画「饑足のボクサー（仮題）」の制作に取り組んできた。日本人、フィリピン人と一緒に仕事をしたが、言葉は壁にならなかった。たとえ文化が違っても、互いに努力することで非常に有意義な交流が...

▽プリランテ・メンドーサ氏（映画監督） 現代のフィリピンを代表する映画制作の第一人者。初監督作品「マニラ・デイドリーム」で2005年スイス・ロカルノ国際映画祭ビデオ部門金豹賞。三大国際映画祭でもフィリピン監督として初めて受賞した。
▽吉本光宏氏（ニッセイ基礎研究所研究理事） 早稲田大学大学院修了後、建築設計事務所、社会学研究所などを経て、1989年にニッセイ基礎研究所入社。文化施設開発やアートワーク計画のコンサルタントとして活躍する。
▽山内昌之氏（東京大学名誉教授） 歴史学者。専攻は中東・イスラーム研究と国際関係史。1993年に東大大学院教授に就任し、2012年から現職。武蔵野大学国際総合研究所特任教授やモロッコのムハンマド五世大学特別客員教授も務めている。

メンドーサ氏 互いの違い受け入れる
吉本氏 オンラインで機会創出

山内氏 女性による「リーダーシップのある文化交流」も紹介しておきたい。ニュージブランドのアーティストや台湾の藝文（ツァイ・インウェン）総統は「命あつての政治経済」であり、「命あつての文化交流」であり、「命あつての文化交流」を実践している。
山内氏 フィリピンと日本の交流は相換の世界でも生まれている。外国出身の力士が多く活躍し、なかにはフィリピン人の母親を持つ力士もいる。異なる文化が融合することで生まれる新しい文化の形を象徴しているだろう。
山内氏 国際会議やライブなど、文化芸術のオンライン活用が進展した1年だったが、リアルでしかできない交流は確実にある。未知の人の出会いや、そこから新しい活動や研究の話が芽生えるといった交流はリアルな場では難しい。社会が不安になつてくるときこそ、文化交流を促進することが極めて重要になる。
（モデレーターは東京大学名誉教授の山内昌之氏が務めた）

日本経済新聞

『アジアが拓く新時代 新型コロナ禍の先へ』

- 第26回会議のプログラム内容
総司会 奥村茂三郎 日本経済新聞社編集国際報道センター長兼 Nikkei Asia編集長
■第1日目 (5月20日)
▽講演
○ムヒディン・ヤシン マレーシア首相
○ヘン・スイキヤット シンガポール副首相兼経済政策担当調整相
○ファム・ミン・チン ベトナム首相
○ファン・セン カンボジア首相
○プラユット・チャンオーチャー タイ首相
○ゴタバヤ・ラジャパクサ スリランカ大統領
○周小川 博鳌（ボアオ）アジアフォーラム副理事長、中国金融学会会長
○スブラマニヤム・ジャイシャンカル インド外相
▽パネル討論「コロナ時代の文化交流」
○プリランテ・メンドーサ 映画監督
○吉本光宏 ニッセイ基礎研究所研究理事
○山内昌之 東京大学名誉教授（モデレーター）
▽スピーチ
○菅義偉首相
■第2日目 (5月21日)
▽講演

- トントン・シスリット ラオス国家主席
○イムラン・カーン パキスタン首相
▽パネル討論「米新政権とアジア」
○エバン・メデイロス 元米国家安全保障会議(NSC)アジア上級部長
○ピラハリ・カウシカン シンガポール国立大学中東研究所所長
○賈慶国 北京大学国際関係学院教授
○佐々江賢一郎 日本国際問題研究所理事長（モデレーター）
▽講演
○ダミアン・オコナー ニュージーランド貿易・輸出振興相
○マハティール・ビン・モハマド マレーシア前首相
○K・P・シャルマ・オリ ネパール首相
○ロドリゴ・ドゥテルテ フィリピン大統領
▽2020年アジア賞受賞者スピーチ
○クラッピル・プラディープ インド工科大学マドラス校教授（科学技術部門）
○ラム・プラサド・カデル ネパール音楽博物館長（文化・社会部門）
▽パネル討論「アジアの持続的成長と変革」
○村上由美子 経済協力開発機構(OECD)東京センター所長(当時)
○澤田康幸 アジア開発銀行チーフエコノミスト
○高橋香織 日本経済新聞社編集委員（モデレーター）
▽パネル討論「コロナ時代に地平を開くスタートアップ」
○BEENEXTファウンダー・CEO
○リテシユ・アガルワル OYOホテルズアンドホームズCEO
○小柳建彦 日本経済新聞社編集委員兼論説委員（モデレーター）